むかし、あるところに、父親と母親と、男の子が暮らしていました。

男の子が六歳のときに、母親の具合が悪くなって、なくなってしまうました。やがて、新しい母親が来ましたが、男の子は、新しい母親をいやがって、口をきこうとしませんでした。それで、母親のほうも、男の子が憎くてなりませんでした。

あるとき、母親は、

「この子がいなかったらどんなにいいだろう」と思って、お医者所の所に行っていました。

「どうかお願いでございます。うちの子が自然に死ぬような薬をいただけませんか」

お医者所は、

「ああ、よしよし。では、まんじゅうの中に薬を入れておくから、これを毎日子どもに食べさせるとよい」といって、あんこの入ったおいしいまんじゅうをくれました。

母親は、毎日、男の子にまんじゅうを食べさせました。すると、男の子は、

「おかあさんは、いつも、こんなおいしいものをくれる」と喜んで、やがて、

「おかあさん、おかあさん」といって、なつくようになりました。すると、母親のほうも、

男の子がかわいくてたまらなくなってきました。そして、

「この子が死んだらどうしよう」と思うようになりました。

母親は、お医者所の所に行って、

「ひどいことをしてしまいました。あの子がなついてくれるようになったら、わたしもあの子がかわいくてしょうがなくなりました。ほんとうに申し訳ないけれども、あの子が死なないような薬を出してください」とたのみました。お医者所は、

「あれは、ただのまんじゅうだ。薬なんか入れていないから、心配するな」といいました。

それからは、親子仲良く暮らしたということです。

おしまい。

村上郁再話

資料『おばばの昔ばなし』水沢謙一／野島出版